

## 戦争体験談

長谷川 文貞（大正 12 年生まれ）

生涯忘れる事の出来ない悪夢の今次の第二次世界大戦、台湾沖航空戦を想記します。

連戦連勝の昭和 17 年も後半に入り、各地の戦況も少しずつ悪化してきました。アッツ島の玉砕、ガダルカナル島よりの転進、ミッドウェー島沖の海戦の大敗等々、18 年 19 年に入り戦況は次第に不利になって来ました。

19 年 10 月 12 日より約 1 週間にわたり台湾沖航空戦が実施されました。私達は兵舎付近で訓練中でしたが、航空機の爆音があまりにも異常なので上空を見ましたら、敵友軍機が一杯でした。敵戦闘機による交戦、敵爆撃機による各種の爆弾投下、それに呼応して友軍の高射砲を主力に各種火砲による応戦が夕刻まで続きました。猛烈な砲線の為、空は夕方ようになりました。大本營の戦果発表とは反対で、友軍の大敗でした。搭乗員の訓練不足が痛感されました。

一番危険を感じましたのは、友軍の高射砲弾の空中より異常な速度で落下してくる無数の破片（縦約 25 センチ横 5 センチ位で両片が無数に裂けている）が一番危険でした。直接体に当たれば即死か相当な重傷です。それから約 1 週間後に米軍は比島のレイテ島に強行上陸しました。

20 年に入り 2 月、新陣地南部高雄州防寮街の奥約 6 キロメートルの地点に移動、戦時編成の第 1 個連隊約 4,500 名、24 時間空爆を受けながら米軍の上陸準備の為、陣地構築に演習に多忙な毎日でした。沖縄戦終了後の戦況は極度に悪化し、米軍上陸に備え、毎日が多忙でした。

8 月 13 日早朝より敵機を見ない為、不安になりました。8 月 15 日、1 種の軍装で全員營庭で陛下の玉音放送を聞きました。万感胸に迫り、感無量でした。その後は自主的に武装解除が行われ抑留生活に入り、翌 21 年 4 月、桜の咲く頃、生まれ故郷の上越市に帰りました。感無量。

第二次大戦に参加して、あまりにも戦争のはかなさ、むなしさ、非情を痛感させられました。